

「バザールの風景」 寺村裕史（国立民族学博物館准教授）

(1) 人やモノが集まる場所 2018年6月9日刊行

ウズベキスタンのサマルカンドは、古くから人とモノが行き交うシルクロードのオアシス都市として著名な街である。

4～7世紀ごろには、商才と工芸技術に長けたソグド人がシルクロードを往来しながら東西・南北の交易に活躍し、14～15世紀にはティムール帝国の首都として繁栄するなど、多くの人やモノ、そして情報が集まる場所であった。現代においては、2001年に「サマルカンド—文化交差路」としてユネスコの世界文化遺産に登録されている。

そのような場所の象徴として、バザールが挙げられるだろう。バザールは「市場」を意味するペルシア語であるが、中央アジアや西アジアのイスラム世界において、定期市と、常設店舗の連なる市場の両方を指す。

似たような商品を扱う店が区画ごとに集まり、食料品から衣料品・日用雑貨など、さまざまな種類の品物が売買される。日本との一番大きな違いは、値札が無く、基本的に売り手と買い手の交渉によって商品の「値段」が決まることであろう。

バザールのあちこちから、値段交渉や情報交換のための大きな話し声が聞こえてくる。そうした独特の喧騒は、その街や地域の元気さを示す一種のバロメーターなのかもしれない。



平たいパン「ノン」が売られるバザールの一角=2014年9月、ウズベキスタン・サマルカンドで筆者撮影

(2) ドライフルーツ 2018年6月16日刊行

中央アジアはステップ地帯特有の乾燥した気候で、水はけがよく日当たりを好むブドウなどの果物が豊富である。それらを生で食べる場合もちろんあるが、保存性を高めるため乾燥させてドライフルーツにすることも多い。

バザールに行けば、そういったブドウ、アンズなどのドライフルーツや、アーモンド、クルミといったナッツ類が所狭しと並べられている。

筆者が毎年9月ごろの調査でウズベキスタンのサマルカンドを訪れるたびに、ドライフルーツを買いに行く店が市中心部のバザールにある。店といっても壁で囲われた個別の店舗ではなく、商品を並べる長い棚（台）に数メートルおきに数字を割り振って店の範囲を区画しているだけで、隣の店舗との境は不明瞭である。

ただ、商人ごとにおおよその出店場所は決まっているようで、先述のドライフルーツの店は、筆者が何曜日に行っても、また翌年に再度訪れても、同じ場所に同じ男性（店主）が店を構えていて、いつの間にか馴染みの店になってしまった。

こうした売り方は、常設店舗と定期市の中間のような形態といえるかもしれないが、店に鍵をかけて閉めることができないため、毎朝品物を並べ、毎夕片付けるという作業が必要で、想像以上に大変そうだ。



山積みドライフルーツや、クルミなどのナッツ類=2014年9月、ウズベキスタン・サマルカンドで筆者撮影

(3) 青空市場 2018年6月23日刊行

ウズベキスタンにおけるバザールの形態として、常設の店舗とは別に、露天商が集まる定期市も各所で開かれる。日本では、さしずめ青空市場ともいうべきもので、車やトラックに大量の商品を積んで、たくさんの売り手と買い手が集まってくる。

商品の内容はさまざま、ある店では、大きなものでは金物の「たらい」から、バケツ、洗面器、手桶、はたまた調理用の鍋に陶器の皿や椀、アイロン台まで売られている。良く言えば品揃えが豊富、悪く言えば節操がなく雑多な品揃え、である。

これらを一体どのように車に積んできたのか、店開き前の状態を見たい気もするが、こうした露店が広場のあちこちで開かれ、とてもにぎわっていて、商人の商魂たくましい一面を垣間見た気がした。

そこから少し離れた別の場所では、大量のスイカやメロンが積まれた大型トラックが数台止められ、荷台のすぐ前の地面にそれらを並べて即席の青果店が開かれていた。店舗に搬入するという手間が省ける点においては、露店のメリットといえるだろうか。

トラック1台分の大量のスイカが、どれくらいの日数で売り切れるのか、あるいは、定期市が終わっても売れ残ってしまうのか、機会があれば調査してみたい。



トラックの荷台からスイカを降ろし、地面に並べて店開き = 2015年9月、ウズベキスタン・サマルカンド近郊で筆者撮影

(4) 材木市場 2018年6月30日刊行

ウズベキスタンのサマルカンド市街地の中心部にあるバザールから車で10～15分ほど離れた場所に、木材を扱うことを専門にした店が集まる、材木市場がある。乾燥したステップ気候で森林面積が狭く、背の高い樹木が少ない同国では、産業用に生産される木材は、それほど多くはない。そのため、建築用の木材などは主にロシアからの輸入に頼っているという。

材木市場には、そうした建築の部材となる木柱や、合板を売る店、のこぎりやくぎ、巻き尺といった木工・建築用の道具類を揃えた店などが軒を連ねている。筆者は、現地での調査で縦40センチ×横30センチくらいの木板が10枚ほど必要になったため、それを調達しようと材木市場を訪れた。

市場では、普段そういった小さな単位で購入する客など珍しいためか、どの店でも最初はなかなか話が進まなかった。しかし最終的には、ある店の職人が、大きな1枚の合板からこちらの注文通りの大きさの板を、2人がかりで一枚一枚のこぎりを使って切り出すという結構大変な作業を黙々とこなしてくれた。

電動のこぎりくらい店にあるだろうと軽く考えていたので、手作業での注文対応は驚くと同時にありがたいような申し訳ないような複雑な気分であった。



注文した通りに薄い木の板を切断してくれる店の人＝2016年9月、ウズベキスタン・サマルカンドで筆者撮影